海中からながめる

所沢市立中央中学校　２年　山田　あかり

世界が大量の塩水に沈む前の地球を、僕は知らない。

ずり落ちる重い本をまた抱え直すと、僕はドアを押しあけた。灰色に染まった海水が僕の体をあっという間に包みこむ。

「いってきます。」

声と一緒にごぼり、と僕の口から泡がこぼれ出た。形を変えながらただよう泡は、家の奥に消える。まもなく、それに答えるように再びやってきた泡が僕の耳元でぱちんと弾けた。

五百年前、地球に元々あった大陸の大部分が海に沈んだ。人類はそれに適応するべく、体の仕組みと化学は進化し続け、ついにそれまでとは全く別の新しい文明を築きあげた。肺呼吸からエラ呼吸に移り変わり海の底に住居を構えるようになった僕らは「海底人」と名付けられ人類の新たな進化系とされた。

つるりとした巨大な船体が威圧を放ちながら僕にゆっくりと近づく。丸くくり抜かれガラスがはめられた窓が無数に並んでいる。重々しく開いた扉から僕は乗りこむ。

「おはよう。」

「やぁ。」

僕と同じ制服を着た仲間が挨拶を交わした。船内は騒々しくいつもと変わらない。僕は空いていた席にすべりこむと、隣に座っていた友人に挨拶を投げかける。友人が答えた。

「おはよう。その本何？すごく重そう。」

「ジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』。」

「何？それ。聞いたこともない。」

「大昔の本だからね。ざっと千年ぐらい。」

ふーん、と友人は興味なさそうに前を向く。

「よく読むね、そんな本。」

「うん。陸の話だよ。スクーナー船も出てくる。君も読む？」

読むわけないでしょ、と友人は眉をしかめた。陸の話になんて興味ないの、と付け足す。僕は黙ってプラスチックに印刷されたページをめくる。目が文字を追いかける。

僕らは海の外に出られない。空気からは酸素を取りこめないし、太陽の下に出れば皮膚が焼けただれてしまうからだ。

海は青く美しく、雄大だと先人は言った。

僕は窓から外をのぞいた。色とりどりの奇抜な小魚や僕の身長程の背に黒々としたラインをかかげる魚が悠々と通りすぎる。ここらの海域は透明度が低く全体的に重苦しい。

海は青く美しく、雄大だと先人は言った。実際に海中からながめる海は、どんよりと灰色く濁り僕らに重くたれこめ、体の境界線を曖昧にさせる。人口密度の高い船内は息苦しく僕

らを閉じこめた。
学校に到着した船のドアが開く。みんながワッと外にとびでようとする流れに押されて僕はところてんのように船内から流れ出た。上を見上げると、太陽の白い光が波にゆられてまだら模様を映しだしていた。まっすぐ落ちながら光は海水と砂の上をぽっかりと照らす。幾筋も流れ落ちた日光はゆらゆらと位置を定めないまま僕の頭上を照らしだした。せまい船内から抜け出した今は、呼吸がしやすいことに気づく。
先人は、後先考えない軽薄な行動により自らを海の底につき落とした。そして今、僕はここで生きている。この生活を当たり前に思い、ここから出て行く気のない彼らを思い出す。それを否定する気はない。だがしかし――。
海面に反射する太陽に右手をかざす。全然届かない。青い透明な水流が僕の横を走り抜けた。
早く大人になりたい。僕はそう思いながら、予鈴の鳴る学校の門へとかけだした。